

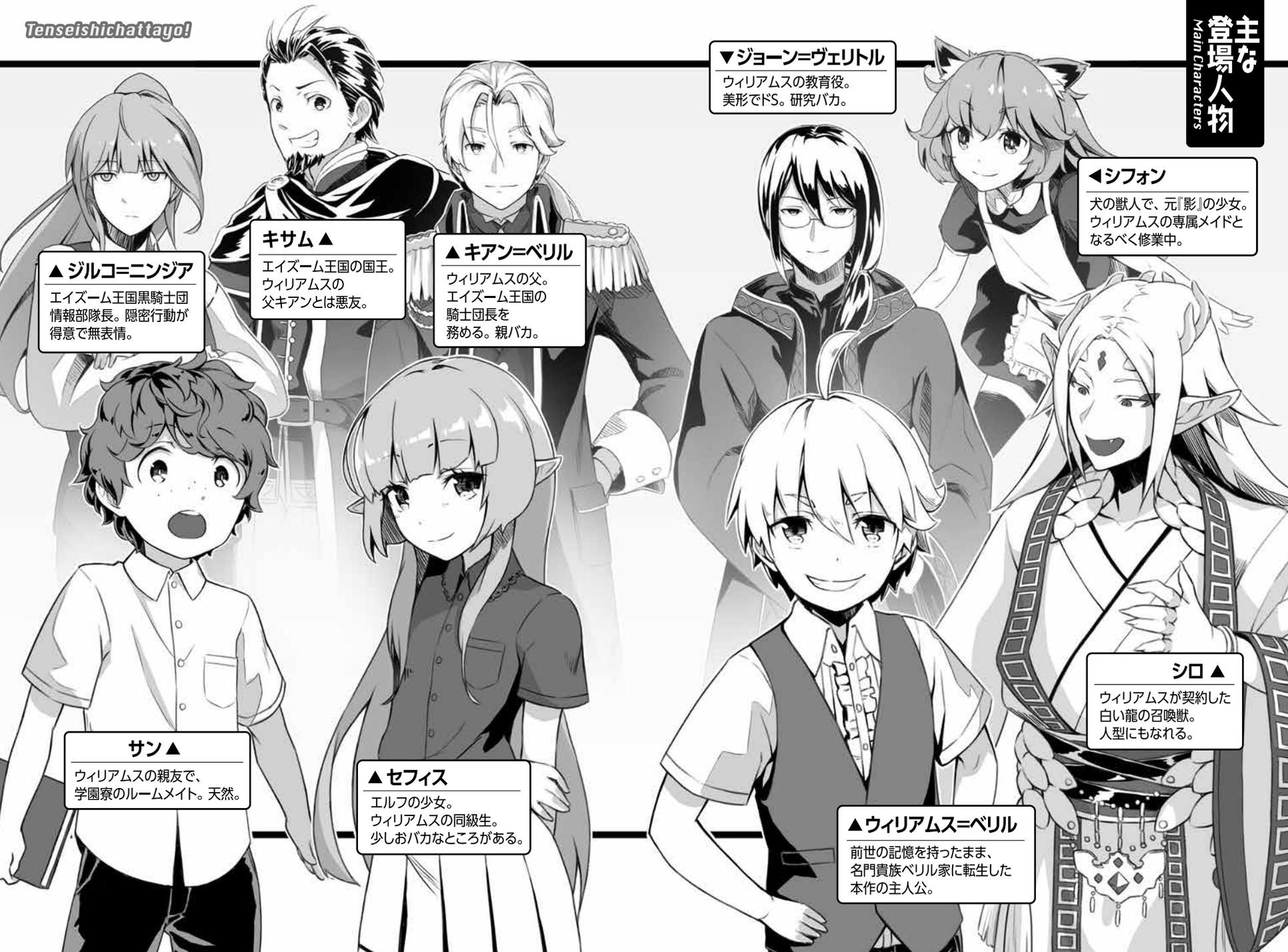


転生しちゃったよ

いや、
ごめん

4

ヘッドホン侍
Headphonesamurai



▲ **ジルコ=ニンジア**

エイズーム王国黒騎士団
情報部隊長。隠密行動が
得意で無表情。

▲ **キサム**

エイズーム王国の国王。
ウィリアムスの
父キアンとは悪友。

▲ **キアン=ベリル**

ウィリアムスの父。
エイズーム王国の
騎士団長を
務める。親バカ。

▲ **サン**

ウィリアムスの親友で、
学園寮のルームメイト。天然。

▲ **セフィス**

エルフの少女。
ウィリアムスの同級生。
少しおバカなところがある。

▼ **ジョン=ヴェリトル**

ウィリアムスの教育役。
美形でDS。研究バカ。

◀ **シフォン**

犬の獣人で、元『影』の少女。
ウィリアムスの専属メイドと
なるべく修業中。

▲ **シロ**

ウィリアムスが契約した
白い龍の召喚獣。
人型にもなれる。

▲ **ウィリアムス=ベリル**

前世の記憶を持ったまま、
名門貴族ベリル家に転生した
本作の主人公。

1

日本の高校生だった俺が、異世界の貴族ウィリアムス・ベリルとして転生して早八年。

三年前には『影』という裏組織に誘拐されそうになったところを返り討ちにしたり、この間は学園祭で襲撃してきた魔獣を倒したりと、なぜか面倒……いや、とつても充実した生活を送ってきたわけなのだけでも。

そんな俺の活躍が国王の耳に入ったせいで、王命により極秘で隣国のヒツツエ皇国に潜入し、調査することになってしまったのである。どうやら俺の八年の人生を充実させてくれやがった誘拐事件とフェルセス学園襲撃事件に『影』が関わっていたらしいと分かったからな。一連の事件の状況証拠を考えると、第一に浮かび上がったのがヒツツエ皇国だったので、とりあえず向かうことになったのだ。

俺の役目は『影』のアジトの情報収集だけだったんだけど、仲間に出されてブチ切れた俺は、結局『影』のアジトに乗り込み、ぶっ潰してしまった。そうして『影』の長スビネルを捕まえて、エイズーム王国に戻って来たのが今朝のこと。

当然、ヒツツエに行っていた間は学園の授業には出てないわけで。

学園の白風の寮に戻つてすぐ、小柄なユリや先輩から、召喚魔法の授業を担当しているヴァリーノ先生がご立腹だという絶望的な情報をいただいてしまったのである。

だつてさ、ヒツツエ潜入は国王の密命だったんだから、誰にも本当のこと言えるわけじゃないじゃん。一応、出かけるとだけは部屋に書き置きしておいたんだけど、まあ普通はサボりだと思うよね……。

最悪な気分陥つたまま朝食のひとつきは終わり、始業の時間が迫ってきた。

今さら抵抗しても意味がないことは分かっているが、俺の身体は理性に反して教室に向かうことを拒否しているようだった。

なんとなく顔色が悪いらしい。同級生のサンにからかわれた。

……くっ、年下のくせに年上をからかうんでねえ！俺の中身は通算二十五歳であるぞ！

まあ、いい。俺は大人で紳士だからな、細かいことは許してやる。

「……ふっ」

アンニューイな笑みを浮かべる俺だが、実のところサンとセフィスに廊下を引きずられていた。

セフィスも俺の同級生で、エルフの可愛らしい女の子だ。

というか、やけに二人が必死なのはなぜだろうか。そんなにも二人は俺のことを思っていないのか。生贄にでも捧げたいのか。お兄さん泣いちゃうぞ。

……仕方ない。認めてやろう。

俺は今、恐怖している。二限目に待っている授業に——いや、より正確に言うならばヴァリーノ先生に年甲斐もなくビクビクと怯えているのだ。

かつこ悪いと罵ればいいさ。否定はしない。

身体の地味な抵抗もむなしく、教室が迫ってきてしまった。

無断で授業を欠席したのは悪いと思ってるさ。それは怒られても仕方ない。

でも、そうじゃなくてもヴァリーノ先生は普段から俺を邪険にして、凍てつく視線を向けてくるのだ。

……大体さ、おかしいと思うんだ。

俺がヴァリーノ先生になんかしたか？ 否！

なら、なぜ俺がこうも彼に目の敵にされているのか。それは、ひとえに父さんのせいである。ヴァリーノ先生は俺が父さん——キアンの息子というだけで、冷たく当たっているようだった。

他の生徒には優しいヴァリーノ先生にあんなに嫌われるだなんて、父さんは一体どれだけのことをしたのだろうか。

うむ。これは一度問い詰めねばならんな。

理由も分からず、あの極寒の地に立たされるのは納得がいかない。

というわけでやってきました、教室。

……ん？
やけに学友の視線がこちらに向いているような気がするんだけど……気のせいだよ？
「……ウイル、今日はサボらないでよね？」
思わず振り向けば、ジト目のサンにそう言われてしまった。
……む。
言い返せないのが、ツライデース。

◆ ◆
さあさあ、みなさん、お待ちかねの……って待ってねえ！ 少なくとも俺は待ってねえけど！
優しくてスマートでかっこいいヴァリーノ先生の楽しい楽しい授業の時間ですよ！

……うん、やめとこう。ひとり心の中、全力で媚を売ってもむなしいだけだ。媚も売りきれないように思えるのも気のせいなのだ。

俺のそんな内心を見透かしたかのようなタイミングで、教室の扉が開かれる。

そしてスラリとした御御足が見えて――

「……ウイリアムス……ペリル！」

「……ふあいつ？」

思わずマヌケな声をあげながら起立してしまった。

だって仕方ないじゃないのよ。なぜか一瞬にして空気が刺すように冷たくなって、絶対零度の氷の世界に閉じ込められたようだったんだもの。

あのまま呑気に椅子に腰を落ち着けていたら、そのまま凍りつくところだったのだ。

「……ちっ」

ええええー！ 今ヴァリーノ先生が舌打ちした気がするのだけど！

気のせいだよ！ 気のせいだ、そうに決まっている。

「なぜ、私の授業をサボったのか。私はこの授業の重要性を口をすっぱくして言い聞かせたつもりであったのだけれどね――」

残念ながら舌打ちは気のせいじゃなかった。淡々と説教を始めてくださっている。

「――そもそも私の召喚獣の授業に出席しないというのは、真面目不真面目だ、規則がどうだ、という問題ではもはやないのだよ、分かるかね？ 一に君の安全。召喚獣は契約しているといえども魔獣なのだ。危険がないわけがないだろう。二に周囲への影響。召喚獣が君の指示に従わず困るのは、なにも君だけではない。分かるか？ 周囲の者が被害を受けるのだ。君にはすでに教室を破壊したという前科があるではないか！ それに……」



はい。こつてりしぼられました。

ヴァリーノ先生がしぶしぶ授業を始めたところでチャイムが鳴っちゃうくらいにね。

それでいいのか。教職者として。

そんなこんなで、今俺たちは長い一日をやつとの思いで終え、白風の寮へ向かう廊下を歩いていた。「もうっ、ウイル！ これからは絶対サボらないでよね！ ……大体なによ、きまぐれで外行つてきましましたっ」

そう言つて口を尖らせるのはセフィスさん。

学園に帰つた直後、セフィスは俺を心配してくれたから、てつきりサボりだとは思われていないと考えてしまったが、彼女の中ではしつかりサボりになつていたようだ。

仕方ないじゃない。さっきの授業時間中、国王からの密命であつたがゆえに弁明できなかった俺は、氷点下のヴァリーノ先生に向かって、「きまぐれで、ふらつとしてきちゃいました！ てへぺろー」と咄嗟に言つてしまつたわけである。

当然、それは火に油を注ぐような真似であつて——いや、この場合、氷に塩をぶちまけるような真似というべきか——その結果、説教タイムを延長させることとなつた。

それでも俺はやつてない！

いや、サボつたけどさ！ ことは犯しちゃつてるけどさ！ やりたくてやつたわけじゃないしー

……嘘です、俺から首を突つ込んだんだつた。

「はあ……悪かつた……俺が悪かつたんだ……」

思わず肩を落としてうなだれてしまう。

「分かれればいいのよ。わたしたちもウイルがいなかつた日はコワイ思いをしたんだからね。今度サボるなんてことがあつたら、クラス一丸となつて妨害することになるわよ！」

「ごめんなさい、ほんと。今後一切やりません」

うん。自分からは絶対に面倒事に首を突つ込まない。

そう決意したときだつた。

「……ル……んだ……」

後ろから小さな呟きが聞こえたような気がして振り返る。

「ん？ サン、何か言つたか？」

サンは俯いて歩いていたが、俺の言葉に顔を上げると首を振つて笑つた。

「え？ 何も言つてないよ」

「んー……そうか、気のせいかな？」

俺は首をひねると、再び前を向いて歩き出した。

確かに聞こえた気がするんだけどな。

……はっ！ もしかして……さっきのは幽霊!?

それかあれだろうか。目が合うと死んでしまふとかいう、例の巨大蛇だろうか？ 配管の中を這いずり回っちゃったりしてるんだろか。……うん、このネタはやめところ。怖いし、色々。ていうか、この世界なら伝説のバジリスク並みの蛇とか普通にいそだもん。俺の召喚獣のシロとか近いものがあるしな。白龍だし。

そのうえ、魔獣ゴーストとか、幽霊っぽいのがそこらの森やら墓やらにいるわけだから。俺は小さく身震いすると、なかったことにしてごまかすようにスキップしながら進み出した。

「と、ところで俺が休んでいた間の授業は、どんな感じのことをやってたんだ？」

「それって、ヴァリーノ先生の？」

慌てて話題を変えた俺に、セフィスがそう返してきた。

「うん。流石に次回まで説教じゃたまらないからな、一応聞いておこうと思って」

「……まあウイルならどの授業も出なくていいようなものだもんね」

そう口を尖らせ羨ましそうにするセフィスには、苦笑を返しておく。

「前回の授業は、召喚獣を呼び出して、イシのソツ？ をはかるとか言ってたわ」

「意思の疎通な。ふーん、そうか。じゃあ会話したり触れ合ったり、で合ってる？」

若干言語が怪しいセフィスに突っ込みつつも考える。

「そうそう、それよ。わたしもリリスちゃんとは結構仲良くなれたし、楽しかったのに」

気づけばセフィスは、ジト目になっておられる。

……今ヴァリーノ先生の話は鬼門だな。

心の中で溜息を吐きながら、俺は再び話題の転換を試みる。

「……そういえば俺、セフィスの召喚獣知らないや。……リリスちゃん(?)は、何ていう種族だ？」

「アスーカっていう鳥なの」

「アスーカか……」

説明しよう。アスーカとは、小鳥のような大きさから恐竜も真つ青なサイズまで大きさを変えられ、騎乗するもよし、偵察に使うもよしと冒険者にも騎士にも人気の高い、鳥型の魔獣である！

頭から尻尾に向けて群青からうぐいす色にグラデーションになっていて、森の上を飛ばせば完璧な迷彩色なのだ！

また風属性の魔法を得意としており、現代技術も仰天な録音や、自らの遮音もできる。

いやしかし君！

大事なのはそこじゃないのだよ。

アスーカは風を愛してやまないらしく、普段はマグロの如く止まることなく空を滑空している。

そう、それゆえ別名『飛び鳥』。

……飛び鳥じゃねえか!!

と、初めてこの魔獣の存在を知ったときに思わず叫んだ俺をどうして責められようか。

そのことを思い出しても、折角つながった別の話題に、俺は必死で乗ることにした。

「……アスーカの色は群青とうぐいすだろ。セフィスの髪も綺麗な黄緑だしな。似合ってるよ」
無理やりニコリと微笑んだのだが、セフィスにはすぐさま顔を背けられました。
む、そんなに見苦しい表情をってしまっただろうか。

それっきり、なぜか無言になってしまったセフィスに俺はどうしていいか分からず。
そのうえ、こういうときに頼りになるサンも無言のままだし。

結局、俺らは寮までの半分以上の道程を終始無言で歩くことになったのであった。

2

セフィスとは寮の階段で別れ、俺とサンは自分たちの部屋に向かった。
しかし部屋に着いた今も、サンは無言を貫いている。

……気まずい。

「あの……サン？」

部屋に入るなり、無言で椅子を引いて机に突っ伏してしまったサンに恐る恐る話しかける。
もしかして俺、自分でも気づかぬうちにサンを怒らせるようなことを言ってしまったのだろうか。
不安になってくる。

自慢じゃないが、俺なら十二分にあり得るから怖い。ここ何年かのうちに何度メイドのシフォン
に鈍感と言われたことだろう。俺は人の気持ちに敏感なほうではないらしいのだ。

怒らせた理由はまったく分からないが……。

「……」

サンはまだ口を一字に結んでいる。

チラリとサンを見やりながら、吐き出しそうになる溜息を我慢して部屋の中に入った。

こうやって口を閉ざしているんだ。机にうつ伏せになっているからサンの顔は見えないが、きつ
と憤怒の表情を浮かべているに違いない。

「……サン、俺、何かしちゃったかな」

とうとう沈黙に耐えられなくなった俺は、再び口を開いた。

するとサンはビクリと肩を揺らして、顔を上げる。

「……ごめん、ぼーっとしてて……聞いてなかった」

そう言ったサンの顔には、本当に今やっと気がついたというような驚愕きょうがくが浮かんでいた。

「いや、いいんだ」

俺が怒らせたんじゃないならな。理由も分からずに不愉快にさせて友人を失ったんじゃない、やりき
れない。

なんだかんだ言って、実はサンはこの世界で初めての同年代の友人なのだ。……悲しくも八歳に

なつての初めてなのだが、まあそこは今は関係ない。

とりあえず怒っていないなら一安心か。

——だからといって、見逃せるものではないけどな。

眉間に皺しわを寄せて溜息を吐いているサンを盗み見ながら、ひとまず部屋を出ていくことにした。

「ちよつと用事があるから、外行つてくるな」

「あ、うん。……行つてらっしゃい」

「あ、ウイール。どうしたの？」

釈然としない気分のまま階段を上ると、普段から談話室と化しているロビーにはセフィスがいた。その後ろには聖母——メリアさまがいる。

メリアは常におっとりとした優しい雰囲気醸し出しているから、俺は心の中で『聖母』と呼んでいる。

「ん、ちよつとな」

セフィスにそう返しながらも、俺は遠慮がちにメリアさまに挨拶をしておく。

前世の頃から女子が二人以上いる場合は苦手なのだ。集団というのは恐ろしい。普段は見せないような思いが、集団になって初めて出てくることもある。げに恐ろしきは集団心理かな。

ま、俺の場合、女子との会話ってだけでドギマギしてしまいますがね。……ふつ。

と言つても、さすがに十歳やそこの諸君にドキドキしてしまうような変態ではない。だから、

必要以上に緊張して無言になることもないぞ。

ダンディズムである。決して言葉に出せないわけではない。俺は無言になつてしまふのではなく、ただ単に、元からかっこいい寡黙な男であるだけなのだ。

自慢じゃないが、俺の女性経験は皆無である。もはやそれは女性恐怖症と呼べる域に達するんじゃないかつてほどで、一部の女子の間では男色の疑いありと囁ささやかれるくらいに……むなしい。うん。それは前世まえの話だ。ほら、俺、今八歳だし。

それでも遠慮がちな口調になつてしまふのは、ひとえにこの魂ソウルに深く刻まれた前世の習性というものなのだろう——悲しい。

「そ、外に出ようと思つて」

俺は首を振つて思考を無理やり中断すると、セフィスたちにそう告げて足早にその場を去つた。



「で、どうされたのですか？ 何か御用があるのでしょうか？」

俺は校門を潜くぐると、そう呟いた。

周囲に人影は一切見られない。

いやいや、別に友人に素気なくされて、見えない『エア友人』に独りで話しかけてる悲しい奴じゃ

ないからね。

「む、やはりウィル殿には敵わぬな」

そう言って門の陰から現れたのは、ジルコ・ニンジアさん。俺と一緒にヒツツエ皇国に潜入した、エイズーム王国の情報部隊長だ。

今日も庶民ルツクな彼だが、漏れ出る魅力を隠しきれていない。クソ、イケメン滅べ。

俺にはマリヨクは腐るほどあるが、男のミリヨクというものが圧倒的に不足している。母音しか違わないというのに、持っているものがごうも違うとは……へこむ。言葉は時に暴力になり得るといふ。母音だけでこの威力とは、なるほど納得だ。

肩を疎めるジルコさんは、相変わらずの無表情ながら、どことなく焦燥した雰囲気だった。

いつもは風の魔法を使いつつ魔力を隠蔽するという高等技術をやってのけているので、さすが国一番の忍者だ——いや、情報部隊長だけだ——と思うのだが、今日寮に忍び込んで来た彼からは魔力が漏れ出てるわ、気配は伝わってくるわで、ただごとではなかった。

それがむしろ俺にあえて存在を示しているように思えて、寮を抜けてきたのである。

……サンとも少し気まづかったし。逃げるようによくはないとは分かっているんだけどな。

「それで、お話はここで？」

俺は質問しながら、ジルコさんに視線を向ける。

「我が屋敷に来ていただけであるうか。お茶でも出し申す」

なるほど、話は長くなる、と。

「……はあ……」

俺は小さく溜息を吐いた。

これはあれだろうか。寮の門限とかオーバーしちゃうパターンだろうか。寮の管理人さんに『門があるのは学園の前であって寮には扉しかないんですよ、寮に門限なんてないんですから入れてくださいよ』とか言わねばならないのだろうか。

……制度あつたらいいのにな。国家機密に関わるような理由で校則を破った場合には特例で許される、みたいな。国と学校の板ばさみになった生徒、困っちゃうじゃん。

……そんな生徒いないか、俺以外に。

まあ、今回の件は俺が自ら首を突っ込んだのだ。だったら最後までつきあわないとな。それが責任っていうもんだ。

この件に関しては、学園のいかなる処罰も甘んじて受け入れるとしよう。



ジルコさんの屋敷、つまりはニンジア屋敷と聞いて心躍らない者がいるだろうか。

期待に胸を高鳴らせ、ドキドキしながら王都の道を歩いた俺を待ち構えていたのは、しかし無情

な現実であった。

「……何て言うか……普通ですね」

思わず肩を落とし、そう漏らした俺にジルコさんは苦笑した。

ニンジヤ屋敷は、夕方のエイズームの街にあまりにも自然に溶け込んでいたのだ。

「ウィル殿は何を期待しておられたのだ？ 風変わりな屋敷では本末転倒ではないか、わざわざ王都に建てておると申すのに」

「木を隠すなら……つてやつですよ。いえ、分かっただけなんですけどね。でも、もうちよつと、こう……」

俺は尻つぼみに言葉を終わらせておいた。

いや、期待してたといつても、実際にはそんなことないだろうとも予想していたわけで、納得はしているのだ。

でもさ、忍者屋敷だよ、忍者屋敷。

そりゃ、何かあると妄想しちゃうじゃない？ 影の館とか結構すごかったしさ。

「では、大した御持て成しも出来ぬが」

扉を開いたジルコさんが促すのに従い、俺は頷いて歩き出す。

「お邪魔いたします」

せめて、襖みみたいな横開きの戸にして欲しかったよ。

ジルコさんの前を通り過ぎながら、そんなことを思っていた。

あれだな、これはきつと内部に色々仕掛けがされているに違いない。隠し扉とか、落とし穴とか、回転扉とか、天井が落ちてきたりとかさ。……つて、それじゃ死ぬわ。

ふつと苦笑しながら、俺は屋敷に足を踏み入れた。

「さて、何処からお伝え申せばよいか……」

ジルコさんにしては珍しく、若干眉間に皺を寄せて唸った。

いつも無表情でいるのは、きつとアンチエイジングのために違いない。よく笑う人は目じりに皺ができるというし、そうすると法令線だって笑顔で刻まれそう。つまり無表情の裏で彼は「皺な」んできたらジルコ、困っちゃうー』と考えているのである。たぶん。

イケメンもイケメンで、それを維持するのは大変なのだ。

粗茶であるが、と出された紅茶に強烈な違和感を覚えつつ、俺はそれをちびちびと飲む。

「……まず、『影』の屋敷から回収した魔道具であるが、ほとんどは魔法陣らしきものが見当たらず、中に魔石が入っているのみであった。しかし一つだけ見たことのない魔法陣の刻まれているものがあり、調査は難航しそうとのことである。もっとも、この件に関わっている研究職がジョーンしかおらぬゆえ、それも仕方がなからうが」

それはある程度予想していた。

あの夜、俺は急いで影の館に戻り、大量の魔道具を回収してペンダント型魔道具に収納しておいたのだが、その存在をエイズームに帰るまですっかり忘れていたのである、俺ってば。

本当に焦って周りが見えていなかったのだと、今さら実感する。あるいは、『影』の事件を解決したことで気が緩んでいたのか。いずれにせよ、今考えたところで意味がないのは分かっているの、後悔も反省もとりあえず後に回しておく。

魔道具の存在を思い出したのは、王城に着いてからだった。

馬鹿だ。ほんと馬鹿。

俺は、ひとまず陛下やジルコさんにその場で受け渡した。その後、やはり魔道具はジョーン先生のところに行ったようだ。

ジョーン先生は俺の家庭教師だった人で、今は王宮で魔法の研究をしている。しかも、『影』の一件を知る数少ない人物の一人だ。だから、魔道具が彼の手に渡ったのは当然だし、俺もそれを見越していた。ジョーン先生の研究室に魔道具が預けられれば、俺も調査に協力しやすいと思ったんだ。『影』の館で俺が手に取ったランプ型の魔道具らしきものには魔法陣が見当たらなかったが、もっと詳しく調べれば何か分かるかもしれない。それに、他にも調べてない魔道具があったし。

この世界の魔道具に刻まれる魔法陣は日本語なので、もしジョーン先生の知らない魔法陣であっても、俺には効果に分かる。

ちなみに、陛下やジルコさんには俺が魔法陣を読めることも詠唱の意味が分かることも、まだ明

かす気はない。いや、今後も明かさないだろう。たとえ二人と友人のような関係になったとしても、友人である前に身分がついてくるのだ。魔法陣や詠唱の意味が分かると知ったら、陛下もジルコさんも、国のためを思えば動くほかあるまい。新たな魔法や魔道具の開発、軍事利用を俺に命令するしかなく、俺も協力しないわけにはいかないだろう。

国が豊かになるのはいいことだが、大きすぎる力は歪みを生じさせる恐れもある。だから、簡単に言いふらすことなどできないのだ。

魔道具については、あとでジョーン先生と一緒に調べればいいだろう。万一、それでも分からなければ、スピネルから聞き出せばいい。

しかし、そう楽観的に考えていられたのは、次のジルコさんの言葉を聞くまでであった。

「そして、これには不肖も嘆ききれないことなのであるが——」
自然と息を呑む。

「——スピネルが死した」

3

「……で、何をやっているのですか」

溜息とともに、なぜかいきなり目の前に現れて唸っているウィル君を見る。

ウィル君は案の定ビクリと跳ねると、ぎこちなく私に視線を向けた。

最近は何うたびにこの反応だ。楽しくて、私は毎回、ついウィル君で遊んでしまう。

しかし、今日はどうも様子がおかしい。

いつものようにビクビクとこちらの様子を窺うのではなく、肩を落として神妙な面持ちで俯うつむいてる。

まあ確かに、さすがにおふざけでここまで突然転移してくるようなことはあるまい。ここは何より王宮の深部——国家機密すら転がっている、王宮勤めの学者の研究室なのだから。

「……じょんせんせー……僕、やってしまいました」

見れば、顔を上げたウィル君の目が少し潤んでいる。ウィル君に言わせると『目から涎よだが出てい』る』という状態らしい。あとで追及したところで頑かたくなに認めないだろうが、彼は泣いているようだ。

つい忘れてしまっが、まだ彼は八歳。学園でつらいことでもあったのだろうか。普段は同年代の友人のように思って接しているが、八歳は八歳なのだ。

……しかも、こう目を潤ませて見つめられると、天使のような容姿も手伝ってこちらが悪いことをしているような気分になってくる。なんとかして慰めなくては。

しかし子守をしたこともなければ、子供のあやし方も私は知らない。

そういうえば、こういうときはジョークだ、とどこかの小説に描かれていたような。

「ついに殺ころってしまいましたか。どこのどなたを殺したのですか？」

思いついたままに言ったが、これではジョークにすらなっていない。よくてブラックジョークだ。しまった、と後悔しながらウィル君を見ると、小さく苦笑している。

「いや、ちよっとジョーン先生、僕の印象どうなっちゃってるんですか。……似合わないジョークまで……すみません。ありがとうございます。気を遣わせてしまいましたよね」

まあ、何とかなったようだ。

似合わないなどと非常に不本意なことは言われたが、キノコでも生えそうなほどじめじめとした暗い雰囲気吹き飛ばせただけでも、結果は上々と言えるだろう。

ウィル君がお礼とともにペコリとお辞儀をして再びその顔を上げたときには、悲壮感などがすっかりなくなり、真剣な表情になっていた。

「……僕に影の館の魔道具を見せてください」

そう言ったウィル君と視線がかち合った。

流れる沈黙。

私は思わずにやけそうになる表情筋を引き締めていた。

このウィル君の表情を私は知っていた。

——そう、これはキアン様の顔。キアン様が騎士団長として大事な仕事をしようといふときに見える鋭い表情そのものだった。

それを八歳で一丁前にしているというのだから、未恐ろしい。本当に。この人の教育係になれた運と、志願した自分の判断力を全力で賞賛したい。神に感謝を捧げるのは何度目だろうか。少なくとも、ベリル家を初めて訪ねた五年ほど前から一気に増えたことは間違いない。



「……僕に影の館の魔道具を見せてください」

息を吸い込んでそう言った俺に、ジョーン先生は合点がいったような表情になった。

俺はジルコさんにスピネルの死を聞いた直後、ジョーン先生の研究室に魔法で転移してきた。

いきなり来てごめんなさい。でも、今は時間が惜しかったのだ。そしてすぐに対応してください。貴方は、流石俺の家庭教師。伊達に何年も付き合っていない。

俺なら、突然人が現れたら絶対うろたえるって。

「……確かにウイル君なら分かるかもしれませんが」

平然としているジョーン先生は立ち上がりつつて柵の前に行き、何食わぬ顔で鍵に魔力を注いだ。ガチャリと音を立てて開いた柵の扉に手をつくど、奥の方に腕を突っ込んでまさぐっている。

「はい、どうぞ。本来は他者に渡してはいけないのですが」

そう言いながらもジョーン先生は、皿を前にして飼い主を見上げる犬のような目をしている。

『ウイル君、早く説明してください』と言わんばかりだ。

少しジト目になりつつも、まあそれもそうか、と内心納得する。

エイズームの王宮のような高名な学者の集う研究所でも、開発される新たな詠唱、魔法陣は一代に一つあるかないかなのだ。

だから影の館で見つけた新しい魔道具には、とてつもない価値がある。

ジョーン先生から渡された魔道具は鳥籠のような形をしており、ちょうど止まり木に当たる所に魔石が設置されていた。

鳥籠の扉を開けて中の魔石を取り出し、そこに刻まれた魔法陣を見る。

「……え？」

魔力疑似増加……？

半ば呆然と声を漏らしてしまった俺に、ジョーン先生は真剣な表情で聞いてくる。

「ウイル君、魔法陣の意味は分かりましたか？」

興味が幾分か見え隠れしているが、普段のこの手のことに関するジョーン先生の様子と比べれば、随分落ち着いている。

「はい。魔力量を擬似的に増加させる魔法陣が刻まれました」

「なるほど……影の長が明らかに自身より高い魔力量を持つ高位魔獣を従えていたのは——」



「この魔道具で魔力を周囲から集め、無理やり自分の中に押し込めていたから、ですね」
沈黙。

思わず、お互い無言で見つめ合ってしまった。

擬似的に魔力量を増強するなんて、さっき俺が言った方法くらいしかない。

「そんなことが……」

ジョン先生が呆然と呻いた。

「スピネルの死因は、これでしょうね……。そんな無茶をすれば、肉体に負担がかかるのは当然です」
あまりの事実に衝撃を受けるとともに、しかしホッとする自分がいた。

スピネルが死んだ原因は俺にあると考え、恐怖しながらここに飛んで来たのだが、それが違ったのだ。

スピネルは、自分よりも魔力のあるデーモンを召喚するために魔道具を使用し、過剰な魔力で身体を蝕まれていた。

俺が何もせずとも死んでいた。むしろ拘束するために俺がスピネルの魔力を抜いたことで、何もしないよりは少し長く生きられたのかもしれない。

「……はあ」

小さく溜息を漏らしてしまった。

現金な奴だな、俺は。

立ち読みサンプル はここまで

何がスピネルをそこまで突き動かしたかは、本人亡き今となってはもう永遠に分からないが、その執念には薄ら寒いものを感じるというのに。

人が結局は死んでいるというのに、だ。

俺は安堵あんどしている。それがいいことか悪いことかは、正直分らない。

でも、『悪役が倒されて、みんな笑顔でめでたしめでたし』なんて、そんな世の中簡単じゃないことはもう知っている。

かといって、たとえ悪者であっても、死者が出ることは絶対に許されないと切り切れるほどの強い倫理観も、俺は持ち合わせていない。もちろん、死者が出ないに越したことはないが、あくまで理想論でしかないことも分かっている。

——結局、これでよかつたんじゃないかと思ってしまう俺は、やはり薄情なのだろうか。

「安心しましたよ、ウィル君」

そんなことを考えていると、ジョーン先生が腕を組んで微笑んでいた。

「安心……？」

反射的に呟けば、さらに柔らかな笑顔を向けられる。

「ええ。もう『影』の脅威に怯える必要はありませんからね。あの『影』のことですから、死んだように見せかけて実は——なんて心配もしていません」

ジョーン先生の言葉がストンと入ってきた。複雑に絡まって固まっていた感情が氷解する。

なるほど。

俺は『影』に怒るより何より、『影』を恐れていたのだ。

実際にスピネルが死ぬところを見たわけじゃないのが、さらに恐怖に拍車をかけていたのかも知れない。

それにしても、自分の命と引き換えに俺を亡き者にしようとしたスピネルの執念はものすごい。魔力は初めから身体の中に存在しているものなので、個人差はあるものの、各自のキャパシティの範囲内なら外部から取り込んでも問題ない。けれど、許容量以上の魔力を一気に取り込むと身体の中で魔力が暴れだし、身体を蝕むしばむのだ。もちろん、外部から魔力を取り込むなんて普通はできないし、そんな現象が確認されたのも歴史上数回しかないらしい。

デーモンを召喚するほどの魔力量なんて一気に取り込んだら、それこそ一溜まりもないだろう。そこまで考えて、なるほどと合点がいった。

影の館で戦ったときの、あのスピネルの疲れたような動きの悪さもそれが原因だったのだろう。よくもまあ動けたものだと思ってしまう。

いやしかし、身体が限界まで蝕むしばまれた状態であれだったとか……ゾッとするぜ。

そこまで奴を駆り立てたものは何だったのだろうか。自殺行為のような手段で突っ込んでくるなんて、並大抵の覚悟じゃない。

何を思い、何のために、そんな行動に出たのだろう。『影』は俺やその関係者に恨みを抱いてい